



第65回 あおり運転と民主主義

▼あおり運転の奥にあるもの

連日、あおり運転の犯人のことが報道に取り上げられている。高速道路で道をふさぎ、停車した車までやってきて運転手を殴打する生々しい画像を見ていると、なぜこの人はこんなに怒っているのかと不思議に思う。思いどおりにならないと、すぐキレてしまう人が世の中にはいるのだ。この犯人は、ほかの地域でもあおり運転を繰り返していたらしい。なんだか、人間として情けなくてやりきれない。

▼民主主義は幻想か

TEDという番組をご存じだろうか。各界の有名人が、様々なテーマで自分の考えを発表するとても興味深いものだ。最近、そのひとつで印象に残るものがあった。アルゼンチンの貧困家庭で育った女性の話だ。貧困に育った人は、若くしてたくさんの子どもを作り、さらなる貧困を生み出す。仕事も覚えがわるく不真面目で長続きしないと非難される。でも、なぜそのような行動をとるのか考えてみたことがありますか、と彼女は問う。貧困のなかで、不規則な生活、安心してご飯を食べられない、自分の家にトイレがない、毎日学校に行けない、そういう環境を想像してみたことがあるのかと。その環境を度外視して、貧困の人たちを非難するのは不公平ではないのかと語っている。そして、貧困にある人たちは、富裕層の人たちに対してつよい怒りを持っているのだと。もちろん、だからといってあおり運転や暴力が許されるわけではないが、「なぜか?」を考えてみると大変だ。

▼危機だからこそ立ち止まって考える

いろいろな場面で民主主義の危機が叫ばれる。アメリカのドナルド・特朗普、イギリスのEU離脱、シリアの内戦、いずれも不寛容の極

みである。しかし、政治家は一人で立つわけではなく、それを支持する大衆がいる。アメリカ・ファースト、という主張を支持する人がいるからこそ、トランプ政権は安泰なのだ。何が不寛容を生み出すのか。その大きな要因は、実質賃金上昇の停滞、将来に夢が持てない、などである。トランプのようなポピュリストは、政治はシンプルだと言い、ツイッターで大衆を扇動する。「よそからきた移民より、自分の生活が大事」という、この一見あたりまえにみえる思想には、民主主義を破壊しかねない危うさがある。正義をふまえた政治を哲学者ジャック・ランシエールは、「声なき者に声を与えるもの」と定義した。とすれば、真の民主主義は「声なき者を尊重すること」であろう。民主主義が民主主義であるためには、人々が民主主義者であることを必要とする。格差と怒りが蔓延する今だからこそ、立ち止まって考え、冷静に対話する姿勢が問われているのではないだろうか。



鳥取大学医学部
地域医療学講座
教授

谷口 晋一
(たにぐち しんいち)